



私は自伝的エッセーというものにとっても惹かれる。その人本来の仕事の合間に書かれた息抜きのようなものとしてではなく、その人の世界全体の容れものとしての人間を知ることができるからである。それはちょうど一つの外国語の意味を知ろうとして辞書に当たる時のプロセスに似ている。その語の語源となった非常に具体的な意味から出発してだんだん抽象的・一般的意味へと辿ると、その抽象的・一般的意味の微妙な味わいが納得され、他の類似の語との違いも把握できる。同じように、人間を具体的に知ることは、その人の仕事や思想の根を知り、その根から展開したのものとしてのそれらのニュアンスを

中村弓子

知るために積極的な意味を持つと思う。素晴らしい人たちの自伝的エッセーを読む喜びもそこにある。それはまた秀れた生き方のフォーム練習のようなものでもある。そしていつの日か自分自身も独自のフォームを作れるという希望も与えられるのだ。この緑蔭図書紹介の機会に、最近亡くなられた湯浅年子さんの自伝的エッセーをご紹介したい。

—湯浅年子『パリ随想』、『続・パリ随想』
『パリ随想3』（みすず書房）

湯浅さんは女子高等師範学校を卒業されてフランスでジョリオ・キュリー教授のもとに原子核物理を研究さ

れ、戦後三十年以上もパリ大学原子核研究所員として活躍された方である。昨年二月パリで亡くなられた。

第一巻の『パリ随想』はジョリオ・キュリー教授への尽きぬ学恩を記しつつご自身の科学者としてのひたむきな姿勢を示された「科学と人生」と、現在のパリ生活のさまざまな感慨を記された「パリ随想」の二部に分れる。これらの文章が雑誌「みすず」に連載されていた頃、私もちょうどフランスで留学生として来し方行く末に不安や期待を持ちながら懸命に生きていた頃であったので、日本から送ってもらったこの連載の文章は食いつくようにして読んだものであった。この本の副題は「ら・みぜーる・ど・りゅっくす」、直訳して「ぜいたくなじめ草」であるが、すべての慣れ合いをそぎ落された外国生活が豊かな思索を生むと同時に身を切るように辛くもあるという両刃の剣のようなその辺の事情を見事に表わした題である。それからまた科学者としての湯浅さんをつき動かしているものは、多くの男性におけるような征服欲ではなく一種の「憧れ」、学問と人に対する少女のような憧れであることも強く印象に残った。湯浅さんにおいて学問は非常にスケールの大きくじつに見事な

「少女趣味」の成就だったと言えるのではないだろうか。

第一巻のテーマが学問と文化であるとするなら第二巻のそれは病であり第三巻のそれは死である。第一巻が出版された年に湯浅さんは胃癌になった。第二巻はその病の経験が中心になっている。病人としての自分の置かれた状況を治療や病院の法的制度の点からじつに客観的体系的に分析されているのを読んで私は実験科学者としての湯浅さんの資質を垣間見る気がした。と同時にこの巻には湯浅さんがフランスでの長い生活で消化された本物のユマニスム(人間主義)が表わされている。それは「病人憲章」の病人の権利の問題や「夕潮」の作家モンテルランとラカサニユ教授の自殺の問題をめぐって読み取られる。この二人は両方とも効成り名遂げての高齢での自殺なので世間の人々は不審に思ったのである。しかしそれは死が「夕潮」のようにひたひたと迫って来る時、ただ自分の手でそれができらうちに命の尊厳を守る最後の行為としてなされた自殺であった。それは言ってみればユマニスム的自殺である。そして癌から癒えたばかりの湯浅さんは明らかにそれに惹かれていた。しかしギリギリのところまで似て非なるもう一つのユマニスム、モンテ

ルランたちの自殺が後退のユマニスムなら「前進のユマニスム」とでも言うべきものを選んでゐる。「ただ自分の動物的生命をいとおしみ細く長く生きることによりも、自分の理想とするものへの精進を励んでゆく方が、その結果自らの生命を縮めることになつても、それはある意味では人生を満ち足りたものとして過すことになるのではないだろうか。」（第三巻に付せられた愛弟子の方の解説によれば最晩年の湯浅さんの生活ぶりはまさに「前進のユマニスム」に貫かれた超人的なものであつたことがわかる。）抑制された文章であるがそこに表明されたギリギリの決意は読む者を揺さぶらさずにはいない。

第三巻は七七年の日本への帰国とその後のことを記した「日本訪問記」に加えて昭和二十三年の随想「黒葡萄」が納められている。この中の「光と蔭と——医者との対決について、生と死について」はまとまつたものとしては最後の文章であるが、これを「みずず」誌上で読んだ時は何とも言えず壮絶な感じがしてたまらなかつた。東京から来る甥のために年末のバリであれこれ氣を使つてどれも思うようにいかないで焦っている湯浅さんの姿の中に、残り少ない生命なのにあれこれしなければなら

ないと焦っている湯浅さんのたまらない氣持が重なつて感じられたからである。湯浅さんの文章そのものも焦っている。一つのことをじつと書いていられないで、これを書いているともう途中であれのことへ行き、また戻ってくるという具合で、「前進のユマニスム」が最後のきりぎり舞いを始めたのを目の当りにする思いがしてたまらなかつたのである。

湯浅さんがお若い頃から宗教というものにつねに深い関心を持っていらつたことは「黒葡萄」を見てもわかる。しかし第二巻の「科学と宗教の接点」にあるように、そのような「信ずるべき」真実が科学の「証明する」真実を包含するものかどうかは判らないという立場でいらつた。と同時に「信ずべき」真実の探究をも最後までやめられることはなかつた。第三巻の解説によれば最後の最後に湯浅さんはそこから一步踏み出されたように思われる。いづれにせよ絶筆に「祖国は日本以外のどこでもないのだ」と書きながらもついにバリで生きることを全うされた「ぜいたくなみじめ草」、この永遠の少女の底知れぬ勇氣に私はこの上なく打たれる。

（お茶の水女子大学）